

CMDJ 2019年 オペラコンサート 愛のときめきと悶え

すみだトリフォニー(小)ホール

9月20日(金) 18:30開演 (18:00開場)



すみだトリフォニーホール 小ホール

2019年9月20日(金)

主催：日本音楽舞踊会議／後援：季刊『音楽の世界』

協力：日本音楽舞踊会議 声楽部会

《プログラム》

《前半》

- 吉田 静香 (Sop.) マスネ: 歌劇 『ル・シッド』より “泣け泣け、わが瞳よ”
J.Massenet: [Le Cid]~ “Pleurez, pleurez mes yeux”
- 大垣 ひで美 (Sop.) モーツァルト: 歌劇 『魔笛』より “われこそ あわれなれ”
W.. Mozart: [Die Zauberflöte]~ “Zum Leiden bin ich auserkoren”
同 “復讐の炎は地獄のように我が心に燃え”
“Der Hölle Rache kocht in meinem Herzen”
- 徳山 奈奈 (Sop.) ヴェルディ: 歌劇 『椿姫』より “ああ、そはかの人か”
G.Verdi: 「La traviata」~ “E strano!..Ah, fors'e lui..Sempre libera”
- 高橋 順子 (Sop.) ヴェルディ: 歌劇 『運命の力より』より “神よ平和を与えたまえ”
G.Verdi: 「La Forza del Destino」~ “Pace, pace, mio Dio!”
- 〈ビゼー: 歌劇 『カルメン』より / G. Bizet: [Carmen] ~ 〉
- 徳山 奈奈・宮本 英一郎 「母の便りは」(二重唱) / “Parle-moi de ma mère”
- 小林 紗季子 (M-sop.) 「セギディーリャ」 / Seguedille
- 宮本 英一郎 (Ten.) “おまえの投げたこの花を” (花の歌) / “La fleur que tu m'avais jetée”
- 土屋 清美 (Ten.) チレア: 歌劇 『アルルの女』より “フェデリコの嘆き”
F. Cilea: [L'arlesiana]~ “Il lamento di Federico”

(休憩)

《後半》

- 高橋 順子 (Sop.) レオンカヴァッロ: 歌劇 『道化師』より [鳥の歌]
R. Leoncavallo: [I Pagliacci]~ <Ballatella >
- 吉田 静香 (Sop.) プッチーニ: 歌劇 『ボエーム』より “あなたの愛の呼ぶ声に”
G.Puccini: [La Bohème]~ “Donde lieta uscì al tuo grido d'amore”
- 大垣 ひで美 (Sop.) J. シュトラウス: 喜歌劇 『こうもり』より “無邪気な田舎娘を演ずるには”
J.Strauss: 「Die Fledermaus」~ “Spiel ich die Unschuld vom Lande”
- 宮本 英一郎 (Ten.) グノー: 歌劇 『ファウスト』より “この清らかな住まい”
C. Gounod: [Faust]~ “salut demeure chaste et pure”
- 〈ベッリーニ: 歌劇 『カプレーティ家とモンテッキ家』より / V.Bellini: 「I Capuleti E I Montecchi」 ~ 〉
- 小林 紗季子 (M-sop.) “たとえロメオがあなたの息子を殺したとしても”
“Se Romeo t'uccise un figlio”
- 野村 優子 (Sop.) “ああ幾度か” / “Eccomi in lieta vesta ~ Oh quante volte, oh! Quante”
- 野村 優子・小林 紗季子 “ああ、これ以上何を求めるのか” (二重唱)
“Ah! da me che piu' richiedi”
- 徳山 奈奈 (Sop.) レハール: 喜歌劇 『メリー・ウィドウ』より 「ヴィリアの歌」
F. Lehár: [Die lustige Witwe]~ <Vilja-Lied>
- 土屋 清美 (Ten.) ジョルダノ: 歌劇 『アンドレアシェニエ』より “五月の晴れた日のように”
U. Giordano: [Andrea Chénier]~ “Come un bel dì di maggio”

ピアノ: 亀井 奈緒美 (全演目) / 司会: 佐藤 光政

企画・構成: 中島 洋一 / 舞台監督: 橘川 琢

◆ごあいさつ ◆

2005年12月に第1回を開催した日本音楽舞踊会議（CMDJ）のオペラコンサートは、今回で第13回目を迎えますが、一昨年に歌劇『ルサルカ』日本語公演を行った後、1年休み、2年振りの再開となります。今回のコンサートは演奏会形式となりますが、大きな舞台で活躍する現役のオペラ歌手、長い演奏経歴をもつ熟年の歌手、これからの活躍が期待される若手の歌手というように、幅広い世代の歌手たちが同じステージに立ち、それぞれの想いを込めて歌います。

その想いが皆様に伝わり、感動していただくことができれば、我々一堂にとってこの上のない喜びであります。

日本音楽舞踊会議 代表理事：深沢亮子
理事長：北川暁子
公演局長：北條直彦

オペラコンサート実行委員：浦富美、中島洋一



《演奏者・司会者プロフィール》

大垣 ひで美（おおがき・ひでみ：ソプラノ）

同志社女子大学学芸学部音楽科卒業。関西室内女性アンサンブルでの活動を経て、パリ留学。パリ市立コンセルヴァトワールで学ぶ。

パリ アンサンブルコンクール第2位。京都、大阪、東京、パリ、ドイツでのリサイタルの他、京都東本願寺、光明寺、イタリア アッシジ大聖堂でのコンサート等に出演。特に 京都での伊吹元子氏(p)と組んだ Duo コンサートは50回を重ねる。クラシックのみならず ポピュラー、シャンソン、謡、詩吟まで 幅を広げている。近年は 公益社団法人 整体協会 身体教育研究所にて 身体と音楽、舞、茶道、書道の関わりについて、研究を深めている。日本声楽発声学会、歌曲アンサンブル研究会、日本音楽舞踊会議会員。





小林 紗季子 (こばやし・さきこ：メゾソプラノ)

国立音楽大学声楽科卒業、国立音楽大学大学院オペラコースを修了。二期会オペラ研修所49期マスタークラス、新国立劇場オペラ研修所第9期生修了。新国立劇場オペラ研修所公演『アルバート・ヘリング』『フィガロの結婚』『カルメル会修道女の対話』に出演。文化庁在外研修生としてイタリアでも学ぶ。『修道女アンジェリカ』バデッサ役でイタリアデビュー。新宿オペラ『カルメン』、小澤征爾音楽塾『ヘンゼルとグレーテル』『蝶々夫人』『フィガロの結婚』、東京二期会『パルジファル』『ホフマン物語』『ジュリアスシーザー』、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、青少年のためのオペラ『ヘンゼルとグレーテル』東京春祭『ワルキューレ』、日本演奏連盟創立50周年記念オペラ『三人の女達の物語』、びわ湖ホール主催『ワルキューレ』などに出演。来春3月びわ湖ホール主催『神々の黄昏』出演予定。日本演奏連盟会員、二期会会員



高橋 順子 (たかはし・じゅんこ：ソプラノ)

千葉県市川市出身。桜蔭高校3年の時に岡部多喜子教授に師事する。武蔵野音楽大学声楽科卒業。在学中より、菊池初美教授、故ロドルフォ・リッチ氏に師事。千葉県新人演奏会に出演。同大学院を経て、岡部多喜子氏、野原広子氏のもと、イタリア歌曲、イタリアオペラ、日本歌曲に研鑽を積み、演奏会に多数出演、幅広い活動を行っている。日本音楽舞踊会議会員。



土屋 清美 (つちや・きよみ：テノール)

日本大学芸術学部音楽学科卒。藤原歌劇団オペラワークショップ研究科修了。国枝誠也・河本喜介、マダム・バダールの各氏に師事。1980年、フランス音楽コンクールに於いてフランス総領事賞受賞、藤原歌劇団創立40周年記念演奏会、「カルメン」「ラ・ボエーム」のロドルフォ「椿姫」のアルフレード、ほか日本のオペラ「春琴抄」「天守物語」など、多数のオペラに出演。その他サロンコンサートに数多く出演。95年より穂高絵本美術館森のおうち「歌と語りのコンサート」にレギュラー出演。蓼科高原三井の森 ハーモニーの家・高原芸術祭にも毎年出演。03年12月横浜市開港記念会館にてリサイタル。03年12月CD「静けさに歌う」をリリースする。2005年CMDJオペラコンサート『カルメン』の、ドン・ホセ役で出演。2009年、2013年CMDJオペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議・日本オペラ振興会・日本演奏連盟各会員・若き芸術家協会 (YAA) 副代表。



徳山 奈奈 (とくやま・なな：ソプラノ)

国立音楽大学声楽科首席卒業。歌曲ソリストコース修了。卒業時に武岡賞を受賞。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻(オペラ)修了。二期会オペラ研修所第61期マスタークラス修了。優秀賞、奨励賞受賞。二期会会員。「桃華楽堂御前演奏会」文化庁文化推進特別事業オペラ新国立劇場オペラパレス公演「コシ・ファン・トゥッテ」フィオルディリージ役出演他、「フィガロの結婚」伯爵婦人役、「カルメン」ミカエラ役等で好評を博している。2019年4月〈二期会コンチェルタンテ・シリーズ〉マスネ作曲《エロディアード》バビロニアの娘にて出演。BS-TBS 日本名曲アルバム ensemble OASIS メンバーとしても活動



野村 優子 (のむら・ゆうこ : ソプラノ)

国立音楽大学演奏学科声楽専修を卒業。在学時、学内での Vocal concert や、オペラ『魔笛』パミーナ 役 (第2幕) 等に出演。卒業時には卒業演奏会、東京同調会新人演奏会に出演する。その後、同大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻 (オペラ・コース) を修了。2年次に国立音楽大学大学院オペラ公演『フィガロの結婚』伯爵夫人役で出演。また、在学中ウィリアム・マッテウツィ氏、ヴィンチェンツォ・タラメリ氏の各氏による公開レッスンを受講。

その後、二期会オペラ研修所マスタークラス第62期修了。修了時に優秀賞を受賞。これまでに声楽を羽根田宏子、岩森美里の各氏に師事。二期会会員。



宮本 英一郎 (みやもと・えいいちろう : テノール)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学音楽研究科声楽専攻修了。大学卒業時に同声会新人演奏会に出演。これまでに声楽を三池三郎、福井敬の各氏に師事。二期会オペラ研修所第51期修了。

これまでにモンテヴェルディ《ボッペアの戴冠》小姓役、《ウリッセの帰還 (ヘンツェ版)》テレマコ役、プッチーニ《ラ・ボエーム》、《ジャンニ・スキッキ》リヌッチョ役、レオンカヴァッロ《道化師たち》ベッペ役、シュトラウス《カプリッチョ》八人の従僕役などに出演する他、数多くの舞台に出演している。コンサートではモーツァルト《戴冠式ミサ》、ハイドン《ネルソン・ミサ》、ベートーヴェン《第九》のソリストを務めている。二期会会員。



吉田 静香 (よしだ・しずか : ソプラノ)

国立音楽大学附属高等学校を経て、同音楽大学演奏・創作学科声楽専修卒業。高校在学中、卒業演奏会出演。大学在籍中、第122回 Vocal Concert、第100回ソロ・室内楽定期演奏会出演。第2回シンド・オーディション奨励賞受賞。CMDJ主催 Fresh Concert 2018 出演。第89回横浜新人演奏会出演および横浜音楽協会賞受賞。第43回国立音楽大学東京同調会新人演奏会出演。現在二期会オペラ研修所マスタークラスに在籍。これまでに羽根田宏子、岩森美里の各氏に師事。

10月6日東村山フレッシュコンサート、1月11日FMSガラコンサートに出演予定。



亀井 奈緒美 (かめい・なおみ : ピアノ)

東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。在学中より蓼科高原音楽祭に参加、室内楽を学ぶ。第3回吹田音楽コンクール・ピアノソロ部門入賞。家永ピアノオーディション合格者披露演奏会、国際芸術連盟主催ガラコンサート、日本音楽舞踊会議主催「アンサンブルの夕べ」「オペラコンサート・シリーズ」などに出演。

第6回かやぶき音楽堂ピアノデュオコンクール2台4手部門ファイナルデァプロマ取得。ヴァレリア・セルバンスキー、深澤亮子、弘中孝、佐藤由紀子、竹尾聆子、雄倉恵子、小田美津子の各氏に師事。現在、ソロ演奏、室内楽、オペラ、合唱伴奏など幅広く活動している。日本音楽舞踊会議 会員。



佐藤光政 (さとう みつまさ : バリトン&司会)

1966年東京芸術大学音楽学部卒業。1973年第7回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第42回日本音楽コンクール声楽部門第1位入賞。1990年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェスティバルに参加。第18回ジロー・オペラ賞受賞。1994年に2枚組CD『佐藤光政 日本の抒情を歌う』を発売。2000年に、『日本の名歌を歌う』を発売。2005年から始まったCMDJオペラ公演において、ずっと司会役および重要な役を担当し、公演の中心的存在として出演し続けている。磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。

《曲目解説 中島 洋一》

◆前半◆

マスネ：歌劇『ル・シッド』より“泣け泣け、わが瞳よ”

ジュール・マスネ 1842年 - 1912) はフランスオペラを代表する作曲家ですが、1885年に書かれた、『ル・シッド』はマスネの作品としては珍しい英雄譚です。“泣け泣け、わが瞳よ”は第三幕で近衛隊長の任命を巡って決闘になり父が死に、父を殺した相手が恋する騎士ロドリグだったことを知ったシメーヌが悲しみに悶えながら歌うアリアです。口短調で歌われるこの曲は、彼女の悲しみが聴く者の心に迫ってくる説得力のある佳品となっています。なお、このオペラでは、最後にシメーヌがロドリグを許し、ハッピーエンドで終わります。

モーツァルト：歌劇『魔笛』より “われこそ あわれなれ”

『魔笛』は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が1791年に作曲した最後のオペラ(ジングシュピール)です。今晚は、その中から高度なコロラトゥーラの歌唱法を伴う夜の女王のアリアを2曲お送りします。

“われこそ あわれなれ”は第一幕6場で夜の女王が「私の娘パミーナが連れ去られた、娘を助けてください」とタミーノに訴えるアリアです。アリアに入ると短調で憂いに満ちた旋律がゆったりと歌われますが、終わりの方では変口長調に変わり速度が上がり、コロラトゥーラの技術を駆使した楽句となります。

同 “復讐の炎は地獄のように我が心に燃え”

第2幕8場で歌われるアリア。ザルストロフを憎悪する夜の女王は、わが娘パミーナに短剣を渡し、「この短剣でザラストロを殺せ。」と命じます。アリアは二短調で始まりますが、へ長調に転じ、高いフルートの音を思わせるような、よく知られたコロラトゥーラの音型が続きます。

このアリアは、コロラトゥーラ・ソプラノ向けのアリアとして、最も有名なものの一つで、歌手の歌唱力の「聴かせ場」となっています。

ヴェルディ：歌劇『椿姫』より“ああ、そはかの人か”～“花から花へ”

ジュゼッペ・F・F・ヴェルディ(1813-1901)は、19世紀イタリアオペラにおける最高の作曲家であるといえるでしょう。小デュマの原作をもとに1853年に作曲したヴェルディの代表作『椿姫』の原題“LA TRAVIATA”は“道に迷える女”の意味で、道を踏み外してドミ・モンド(高級娼婦)となったヴィオレッタが、かなわぬ真実の愛を求め、悩み苦しむ様を描いた愛のドラマです。

第一幕で歌われるこのアリアは、ヴィオレッタの心に、少し前に会った純情な青年アルフレードの面影が去来します。はじめて知った真実の恋に心を震わせ、アルフレードが歌っていた愛のモチーフを歌います。

(ああ、そは彼の人か)沈黙の後、彼女の心は現実に呼び戻り、自分は快樂に生きてきた女だ。真の恋などかなわぬ身なのだ、と自暴自棄になって快樂の喜びを歌っていると、恋の喜びに満ちたアルフレードの歌声が聴こえて来ます。激しく揺れ動くヴィオレッタの心。(花から花へ)

ヴェルディ：歌劇『運命の力より』より“神よ、平和を与えたまえ”

『運命の力』は運命に翻弄される人間の悩みと神への祈りを書いた作品で、1961年に作曲され、翌年晩秋にロシア：ペテルブルク(現サンクトペテルブルク市)の帝室歌劇場で初演されました。

“神よ、平和を与えたまえ”は、このオペラのヒロイン、レオノーラがこの作品の終わりに近い部分で、いまだに捨て切れない、愛するアルヴァーロへの想いを断ち切ろうと、「自分に死による平和を与えてください」と神に祈る歌です。序曲でも登場する運命の指導動機に導かれ pace(平和)という言葉が繰り返されます。レオノーラの思い詰めた内面を表現するためには、リリコ・スピントの強く響き渡る声が要求され、日本のソプラノ歌手にとっては、なかなかの難曲となっています。

《ビゼー：歌劇『カルメン』より》

ジョルジ・ビゼー（1838～1875）が作曲した『カルメン』は、言わずと知れた最も人気のあるオペラ作品の一つですが、ビゼーは『カルメン』の初演から三ヶ月後、静養中にリュウマチという持病を持ちながら川で水浴びをしたことが原因で、36才という若さで、この世を去っています。

本日は、三曲を選んで演奏します。

「母の便りは」（二重唱）

第一幕：煙草工場の休憩時間にカルメンは他の女工達をともなって現れ「ハバネラ」を歌いながら、自分に興味を示さない若い兵士ドン・ホセに向かい花を投げつけます。ホセはそれを拾います。

そこに、カルメンとは対照的に清純で初心な郷里の娘ミカエラが、ホセの母からの手紙を届けに現れます。そこで歌われるのが、二重唱「母の便りは」です。ホセは「もし嫁にするなら、お前に手紙を届けた娘だよ」という母の手紙の言葉に、その時は「そうするよ」とうなずきますが、花を投げつけたカルメンのことが忘れられません。

「セギディーリヤ」

カルメンは女工を傷つけた罪で牢獄行きとなりますが、ホセはその護送を命じられます。カルメンはホセを誘惑し自分を逃がしてくれと頼みます。その時カルメンが歌うのが「セギディーリヤ」です。ホセは彼女の魅力に抗えず、彼女を逃がしてしまいます。

“おまえの投げたこの花を”（花の歌）

ホセは、カルメンを逃がした罪で二ヶ月間入牢しますが、許されて今や愛人となったカルメンのもとへ向かいます。カルメンはカスタネットを操りながら踊りと歌で彼をもてなします。しかし帰営ラッパを聴き兵舎に返ろうとするホセをカルメンはなじります。

そこでホセは「お前が投げた花を今でも大切に持っている」と“おまえの投げたこの花を”（花の歌）を歌い、カルメンに対する変わらぬ愛を示します。

その後、兵舎に戻れなかったホセはカルメンに誘われ密輸団の仲間に入り彼女と共にします。

チレア： 歌劇「アルルの女」より “フェデリコの嘆き”

フランチェスコ・チレア（1865-1950）には、『アルルの女』や『アドリアナ・ルクヴルール』などの作品があります。一時は、レオンカヴァッロやマスカーニらに続くヴェリズモ・オペラの旗手として評価されていましたが、今でも彼のオペラ作品は比較的多く上演されています。

『アルルの女』は、ビゼーの劇音楽と同様、ドーテーの原作にもとづいています。“フェデリコの嘆き”は、アルルの女に心を奪われた主人公のフェデリコが、周囲から反対され、恋の悩みを深め、安らかに眠ってしまいたいと歌うアリアで、へ長調 6/8 で歌い始めますが、「私は眠りたい」と歌う個所から、ホ短調 4/4 に変わり、情熱的に高まって行きます。イタリアオペラならではの美しいアリアで、豊かな声量と長い音を歌い続けられる呼吸法を身につけた歌手が歌えば、聴衆を十分に堪能させる力をもっています。

◆後半◆

レオンカヴァッロ：歌劇『道化師』より【鳥の歌】

ルッジェーロ・レオンカヴァッロ（1857-1919）が作曲し 1992 年にミラノで初演された『道化師（パリアッチョ）』は、1990 年に初演されたマスカーニの『カヴァレリア・ルスティカーナ』と並びヴェリズモ・オペラ作品の双璧との評価を得ていますが、2 作品とも演奏時間が短いため、現在では 2 作をセットして上演される機会が多いようです。

旅芝居一座の座長カニオの妻であるネッダは村の青年といい仲になっているますが、夫の険しい目を見て不倫の発覚を恐れます。しかし気を取り直し、子供の頃を思い出し、鳥の真似をして歌うのが“鳥の歌”です。鳥の囀をイメージさせる伴奏に導かれ、嬰へ長調 3/8 拍子で歌う、可愛らしく魅力的なアリアで、このオペラの中では、単独で演奏される機会が最も多いアリアとなっています。

プッチーニ：歌劇『ボエーム』より “あなたの愛の呼ぶ声に”

『ラ・ボエーム』はジャコモ・プッチーニ（1858-1924）が作曲したオペラの中でも特に人々から愛されてい

る作品と云えましょう。

詩人のロドルフォと、純情で病弱なお針子娘のミミは恋におちいります。しかし、病気を患ったミミは、自分の余命がそう長くないことを感じます。第3幕で、病弱な自分が連れ添っていても、ロドルフォの足手まといになると考えたミミは別れを決心し、二人になると、突然「さようなら」を言いますが、ただバラ色の帽子は思い出のために取っておいて欲しいとねだります。最初出逢った時に歌った“私の名はミミ”と同じく、ミミの動機で始まり、以前使った音の動機をいくつも再現させることで、ミミの心にある愛の思い出が聴衆にも伝わって来るように書かれており、ミミの心根が聴く者の心に染みこんで来るような、悲しくも美しいアリアです。

シュトラウス：喜歌劇『こうもり』より “無邪気な田舎娘を演ずるには”

ワルツ王ヨハン・シュトラウスⅡ世(1825-1899)がオッフェンバックの勧めもあって、手がけた喜歌劇『こうもり』は、レハールの『メリー・ウィドウ』とともにウィーン喜歌劇を代表する作品となり、現在でも世界中のオペラ劇場でしばしば上演されています。

オルロフスキー侯の舞踏会に招待されたアイゼンシュタイン家の女中アデーレは、女優オルガに変装し、第三幕では主人の目の前で、コケティッシュな田舎娘を演じて“無邪気な田舎娘を演ずるには”を歌います。ト長調 6/8 で歌い始めますが急速な二拍子となり、コロラトゥーラの技術を駆使し華やかに歌い終わります。

グノー：歌劇『ファウスト』より “この清らかな住まい”

ドイツの文豪ゲーテの詩劇『ファウスト』第一部を題材にシャルル・グノー（1818-1893）が作曲した歌劇『ファウスト』は彼が多く手がけたオペラ作品のうちで、最も成功した作品となっています。

第3幕でファウストは悪魔メフィストフェレスを伴い、マルガリートの家を訪れ、彼女の清らかで幸せな暮らしぶりに感動し、“この清らかな住まい”を歌います。変イ長調 4/4 で歌われる静かで美しいアリアです。その後メフィストフェレスが宝石の入った小箱を玄関に置き、二人は立ち去りますが、マルガリートは、その小箱をファウストからの贈り物と思い、強い恋心を抱くようになります。

《ベッリーニ：歌劇『カプレーティ家とモンテッキ家』より》

ヴィンチェンツォ・ベッリーニ（1801-1835）はドニゼッティとともに19世紀前半のイタリアオペラを代表する作曲家で『夢遊病の女』、『清教徒』などの作品を残していますが、この作品は彼が28才の時書いた作品です。物語はシェクスピアの戯曲『ロミオとジュリエット』と酷似していますが、どちらもイタリアの同じ伝説をもとに書かれたということで、シェクスピアの戯曲との直接の関係はなさそうです。しかし、このオペラに書かれているのは、まぎれもなく、ロミオとジュリエットの世界です。なお、このオペラでは、ロメオ（ロミオ）をテノールではなく、メゾソプラノが演じています。ズボン役（男性役）を演じる機会の多い、メゾソプラノにとっても、なかなか魅力的な役ではないかと思えます。

“たとえロメオがあなたの息子を殺したとしても”

第一幕第一場で、ジュリエッタの父親でカプレーティ家の当主カペッリオに向かって、かつて彼の子息を抗争で殺してしまったことがあるロメオが和解を申し込み、自分にジュリエッタとの結婚を許して欲しいと歌います。ト長調 9/8 ではじまるベッリーニ特有の美しい旋律で始まりますが、やがてロメオの意志を示すような力強い楽想に移って行きます。このアリアは音域的にも非常に幅が広く、メゾソプラノ歌手の能力の限界にまで届くような難曲です。

“ああ幾度か”

ジュリエッタは自室にこもり、結婚衣装を見つめながら、父から強要されたデバルトとの結婚への悲しみと、ロメオとの愛を歌います。変ホ調調で歌い始めますが、ト短調に移り、美しく憂愁な情がこめられた旋律が歌われます。この部分には旋律作りの天才ベッリーニの才能が遺憾なく発揮されているように思えます。

“ああ、これ以上何を求めるのか”（二重唱）

ジュリエッタがすでにロメオに対する想いを打ち明けていた医師のロレンツォが、ロメオをともなってやってきます。二人は我を忘れ抱擁し、愛の二重唱を変イ長調で歌います。はじめは一人ずつ歌いますが、

やがて二人の声は3度で重なりあい、美しい愛のハーモニーを奏でます。

レハール:喜歌劇『メリー・ウイドウ』より 「ヴィリアの歌」

フランツ・レハール (1870-1948)は、20世紀のはじめ、ウィнна・オペレッタ分野で活躍した代表的な作曲家で、多くの喜歌劇を一曲していますが、1905年に作曲された『メリー・ウイドウ』はその代表作です。世界中で屢々上演されていますが、我が国でもしばしば上演され、本会でも過去2回採り上げたことがあります。『メリー・ウイドウ』は英語で、日本語訳は『陽気な未亡人』です。

日本語で上演される機会も多く、日本語の楽譜も出版されています。

第2幕:若い未亡人ハンナが故郷を思い歌う「ヴィリアの歌」(森の乙女の歌)は、ト長調3/4で歌われる素朴で清らかなアリアです。未亡人といっても、結婚してからたった8日間で老夫と死別したハンナの心は、まだ乙女そのものなのでしょう。

ジョルダノー:歌劇『アンドレアシェニエ』より “五月の晴れた日のように”

ウンベルト・ジョルダノー (1867-1948)はイタリアのオペラ作曲家です。いくつかのオペラ作品を残していますが『アンドレア・シェニエ』彼の代表作で革命前後のフランスを舞台に、実在の詩人アンドレ・シェニエの半生を描いた4幕からなるオペラで、ヴェリスモオペラ傑作の一つとして評価されています。

は、死を覚悟したシェニエが訪れた友人に自分が書いたばかりの詩を読み上げるアリアです。嬰へ短調6/8モデラートで歌い始めますが、終わりの方では同主調長調の異名同音調変ト長調になり、死に挑む勇気を高らかに歌い上げます。



今回の公演に関する、出演者からのメッセージ

大垣 ひで美 (ソプラノ)

今回は歌劇「魔笛」より夜の女王と喜歌劇「こうもり」より小間使い アデーレ という全く違うキャラクターを歌わせていただきます。

夜の女王の歌う娘を奪われた悲しみや怒りは(5人の子を持つ母としては)十分に理解、共感できるものです。

超絶技巧の難曲アリアとして有名ですが、その一音一音にこめられた作曲家の想い、魂の叫びをそのまま音にのせて歌いたいと思っております。

次の小間使いアデーレのアリアは舞踏会で「私は女優になりたいのです。こんなに演技も歌も上手な私をほっておく手はありませんよ。」と自信たっぷりに田舎娘、女王、パリの貴婦人を演じます。今回は動きもつけて歌ってみます。

西洋の天才によって作られた名曲を皆さまの前で演奏させていただく、この一期一会の機会を深く深く感謝しております

小林 紗季子 (メゾソプラノ)

今年はカルメンとロミオを歌わせていただきます。メゾソプラノはカルメンのような妖艶な女性の役からロミオのような若い男性の役を歌うこともあり、とてもやりがいがあります。また今回はキャラクターが違いすぎるのでとてもコントロールが大変ですが、カルメンとロミオの素敵さが皆様に伝えられるように歌いたいと思います。

高橋 順子 (ソプラノ)

本夕はオペラアリアの夕べにお越し下さいまして誠にありがとうございます。猛暑続きの今夏、

国内外では 様々な心痛める出来事や、心配な事件も後をたちません。そんなとき こうして素晴らしいオペラ作品を歌える事は なんと幸せな事か！

物語の中における人々の語らいが 音楽と融合し、輪郭のくっきりとしたアリアの数々が歌われます。

本日歌わせて頂く1曲目は……

過酷な自分の人生に 平和を求め祈りながらも、複雑で残酷な運命によって傷ついていくレオノーラによって 最後の場で歌われるものです。

2曲目は 道化師一座の座長の妻ネツダが、恋人との不貞を嫉妬した夫により殺されてしまうというストーリーです。このアリアは第1幕で 夫を恐れながらも恋人と関係が続けているネツダが、心配しながら、空飛ぶ鳥を眺めながら 自由にカ一杯羽ばたく鳥たちに、自分の想いや願いを込めて歌うものです。

オペラアリアは 人の世の喜びと哀しみ、安らぎと不安を 言葉と音楽にのせて語りかけます。本夕は 聴いて下さる方々と演奏者との 距離を出来る限り接近させた 楽しく心に残るコンサートになればと 心より願っております。

土屋 清美 (テノール)

2年ぶりにお目にかかります。

私が声楽を学びだした頃、レコードから聞こえるのは、タリアビーニ、スキーパー、ジューリなどでした。その後ステファノー、デル・モナコ、コレルリなどが現れ我々を魅了してくれました。今思えばこの時代のテノールは皆個性が強かったなと思います。その後、カレーラス、ドミンゴ、パパロッチの3大テノールが現れテノールの声が一般の人々にも受け入れられる時代が来たのかなと、。。。

しかし最近ではテノールが小粒になってきたのが残念です。今でも覚えています、

学生の時アメリカ人の指揮者の先生に「テノールはね、野球で言えば4番打者です、しかも全打席ホームランを打つのが宿命ですよ」（日本語が達者な先生でした）幾ら何でも無理でしょ。

そう思いませんか。今日は、チレアの「アルルの女」より”フェデリコの嘆き” 。
ジョルダナーノの「アンドレアシェニエ」より”五月の晴れた日のように” この2曲を歌います。

徳山 奈奈 (ソプラノ)

この度はご来場いただきありがとうございます。私が演奏する、3つのオペラの「椿姫」のヴィオレッタ、「カルメン」のミカエラ、「メリーヴィドウ」のハンナですが、それぞれ全く異なったキャラクターを持っています。また意図せず、イタリア語、フランス語、ドイツ語という異なった言語の曲目となりました。演奏を通して、音楽の美しさだけでなく、キャラクターの違いや、その中に秘められる愛の想い、それぞれ言葉の持つ印象の違いなども楽しんでみてください♪

野村 優子 (ソプラノ)

この度はコンサートに出演させていただけること、大変光栄に思います。2年前はCMDJ主催のFresh Concertにてオペラ「ランメルモールのルチア」より”あたりは沈黙に包まれ”を演奏致しました。私たちのような若手に演奏の場をくださり、心から感謝致します。

今回は尊敬する大先輩、小林紗季子さんと「カプレーティ家とモンテッキ家」より二重唱を演奏させていただきます。V. ベッリーニにより作曲されたこの作品は「ロメオとジュリエッタ」を題材としています。イタリアでは古くから歌や踊り、物語や劇の形でこのお話が伝承されており、特に18～19世紀には説話集などとして数多く出版されていました。ベッリーニの作品はこれらの小説などを題材としています。バレエや映画でも有名なロメオとジュリエッタ、見比べてみるのも面白いかもしれません。

今回演奏するのは1幕のシーンです。「一緒に逃げよう」とジュリエッタの元に駆けつけるロメオに対し、父や家を思うジュリエッタはそれを断り、苦しみます。

舞台となる13世紀のイタリアでは実際に各地の都市や領主が2つの党に分かれ争っていました。実話を元にしたお話ではありませんが、実際に起きていたかもしれない…と想像しながらお楽しみ頂けたらと思います。ロメオを想い1人歌うジュリエッタのアリアと共に、心を込めてお贈りします。

宮本 英一郎 (テノール)

2015年のコンサート以来の出演となります。今回の《愛のときめきと悶え》というテーマは、大変オペラ向きではないでしょうか。なぜなら、オペラの登場人物は大方愛にときめき、悶えているからです。その中から、英雄的な人物ではなく、より純粋に愛に直面している(なおかつ私が共感できる)人物を2人選びました。《カルメン》のドン・ホセ、《ファウスト》のファウストです。

ドン・ホセは、母親から口づけを託されるほどの仲のミカエラがいますが、カルメンに身を落とします。彼はそうすることでしか愛に向き合えなかったと私は感じています。

ファウストは悪魔と契約してでも若さを手に入れ、そこでマルガリーテという女性を愛します。今まで自分が得た知性、知識よりも1人の女性を愛することが上回りました。

素敵な出演者と共に音楽を通じてお客様の前に立てる事を光栄に思います。どうぞお楽しみください。

吉田 静香 (ソプラノ)

CDMJ主催の演奏会に再び出演させていただけること、大変嬉しくとても光栄に思っております。今回のテーマ「愛のときめきと悶え」に合わせて、「ル・シッド」よりシメーナのアリア“泣け泣け、わが瞳よ”と「ラ・ボエーム」よりミミのアリア“あなたの愛の呼ぶ声に”の2曲を選ばせていただきました。

「ル・シッド」は前半のハイライトで歌われる「カルメン」を作曲したビゼーと同じフランスの作曲家、マスネが書きました。マスネにしては珍しく歴史的英雄を題材にとった作品です。シリアスながらも流麗で美しいメロディーが聴きどころです。

「ラ・ボエーム」はイタリアを代表するオペラ作曲家プッチーニが書きました。ロドルフォとミミとの感動的な出会いと別れ、最後のミミの死と涙なくしては観ることができない作品です。恋人のロドルフォが自分の病のことで思い悩んでいるということを知ったミミは別れを切り出そうとします。ここで歌われるのが、「あなたの愛の呼ぶ声に」です。

それぞれのオペラの美しくも儂い愛の世界観に浸っていただけたらと思います。どうぞ最後までお楽しみください。

佐藤 光政 (バリトン・司会)

今回のオペラコンサートは、“愛のときめきと悶え・・・” さて。どんな舞台に成ることか、皆様と一緒に楽しみにしているところデス。「司会」といっても、客席に座って演奏を聴かせてもらい、時々舞台上がっては、簡単なコメントを発するくらいの楽しい立場であります。

間もなく開演のベル、どんな歌が、そして想いが伝わって来ることか……。楽しみです。



社会福祉法人 緑の風



障害者就労支援事業 さくらベーカリー

社会福祉法人緑の風は、知的障害のある人達が
「地域で自分らしく暮らし、地域で働くこと」の
支援を行うために活動をしています

社会福祉法人 緑の風 <http://www.midorinokaze.jp>

長坂センター : 〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ヶ森 994-1
障害福祉サービス事業所「緑の風」

千代田センター: 〒102-8688 東京都千代田区九段南 1-2-1 九段第3合同庁舎内
千代田区立障害者就労支援施設 ジョブ・サポート・プラザ ちよだ
障害者就労支援事業 さくらベーカリー

anibainu anibainu aieat Gualdini



社会福祉法人「緑の風」を支援する「麦の会」

後援会「麦の会」は、「緑の風」の活動を支える組織として2003年に発足しました。
会員の皆様のご支援とご協力により、「緑の風」主催の催し物への参加、チャリティーコン
サート開催やオリジナルカレンダー販売などの活動をし、その収益は「緑の風」への援助
金として寄付しています。